

朗
讀
篇

朗讀法の要領

東京高等師範學校 教授 日下部 重太郎

今日は朗讀について御話申上げる幸を得まして嬉しう存じます。さて朗讀は術でありますから、理論だけでは役に立ちませぬ。けれども朗讀の實際の根據になる理論を申上げて置かないと、そのコツが分りませぬから、先づ理論を申上げて、それから拙いながらも實際の朗讀を聊か試みたいと存じます。ついては別紙の謄寫書きと見くらべて理論からお聽き下さい。

謄寫には最初に朗讀法の組織を書き、次に國語の音聲に關する二三の書物から面白い例を擧げて置きました。

（一）國語の本質、話術と朗讀

言葉の本質は音聲が第一です。第一は音聲、第二は文字に之を書いたものであります。所が後になると、音聲よりも文字に書いたものが主要なものゝやうに思ふ人のあるのは間違です。朗讀は文字に書いてあるものを読むのですが、その元である音聲に立歸らなければ徹底致しませぬ。我國では「言ひ繼ぎ語り繼ぎ」に始つて、奈良朝のころまでは主として口から耳へ訴へたのです。ですから上古の日本文學である古事記や萬葉集や祝詞や宣命など皆實に立派なものでござります。今でもこれを讀んで見ますと、言葉は古いけれども、吾々の先祖の心から出て來た言葉ですから、實

に立派な文學と感じ居ます。その後平安朝の數多の物語などはどうですか。その物語は話して聞かせるといふ小説ですから、竹取物語や源氏物語など皆言文一致でござります。鎌倉以後になりましても平家物語や太平記、謡曲や狂言など、皆耳に訴へることを元としてゐます。それから江戸時代の上方の西鶴や近松などの作品、江戸の諸作家の作品も皆耳に訴へるものでござります。このやうに國文學の名高いものは何れも皆耳を元にして居ります。かういふ風に發達して居りますけれども、また一方に王朝の頃から漢文脈風のもの、即ち耳には遠くて文字に訴へ、目で読む所の文章も出來、また時代の言葉が變つたに拘らず古い言葉で書く所の文章も出來、それから言文二途になつて參りました。即ち元は言文一致であつたのが後には言文二途のものが出來ました。かういふ次第で、我が國文には言文一致の文章と言文二途の文章との二系統があります。その後者は目で讀む文章として發達したもので、作りものであり、口語ではございませぬ。併し如何なる文章でも元は言葉から出たのであります。途中からさういふ作り物が出來たのです。所が明治時代になりましてから、我々日本國民が斯ういふ文章と言葉とかけ離れたものでやつて居ては、教育を始として有らゆる國民生活に不都合千萬であるから、元の言文一致に立歸らねばならぬといふので、今日の言文一致時代となりました。もう今日は手紙の文も候文で書く人は少くなりました。それから最近はラヂオが出來て全く耳に訴へることが始まりました。で、今後のこの日本の言文一致の發達は驚く可きものであります。此際に文部省に於てかういふ話術の講習會を開かれて、全國の各方面の方々が集つて御研究になりますことは、將來の國語の發達のため誠に慶ぶ可きことと存じます。それについて私如きも出まして、聊かでも皆様の御参考になる事を申上げ得ることになつたのを仕合せに存じます。

この朗讀法と申すことは、廣義の話術の一部分であります。話術といふことは、西洋の elocution といふことに當ります。

るやじわいもせう。西洋では總べて言葉で言ひ表はし読み表はすことをエロキューションと申します。このエロキューションはギリシャやローマの昔から盛に發達しまして、今日に至るまで詳細に研究されて居ます。つまり、エロキューションは話す術です。所で、話すといふと何だか讀むといふこととは別になるやうに思はれますから、どうも譯語は難かしいものです。エロキューションは言葉に言ひ表はす術といふのが適當で、話すことも讀むことも含まれて居ます。どうも朗讀法といふと讀むことだけだ、話術といふと話すことだけだといふやうに誤解されますが、その名稱の文字に拘はつてはいけませぬ。我々が言葉に言ひ表はすのがエロクイで、術がショーン、そのより音譯してエロキューションと申せば、さうした誤解は無くなります。

エロキューションは西洋では大體之を二つに分けまして、一つは *oratory* 卽ち演述と譯します。これは何でも創作的にその人が演述することでござります。また一つは既に出來た文章を読み上げるといふこと即ち讀述でござります。これがまた二つになります。その一つが、文章を見つゝ讀む *declamation* 卽ち朗讀。もう一つが文章を見ないで詠記して讀む *recitation* 卽ち詠誦でござります。例へば狂言とか謡曲とか淨瑠璃の文句を臺本無しに表出するのはレシテーションに屬します。朗讀は文章を詠記するを要せず、その文章を見て讀むのです。それで大體、エロキューションは演述と詠誦と朗讀、斯ういふことになります。それで創作的の演述が元で、復現的の讀述は末のやうに思はれます。が、話術の修養のためには、讀述から進んで演述に至るのが宜しい。と申すわけは、今日の如く文化が大いに進んで参りました以上は、今迄の人々の苦心の結果として模範的な演述とその方法が出來て居るのですから、我々が文化を進めて行くには、今まで進んで來た文化を更に一層進めて行くといふのは當然であるからです。それで我々が演説をするとかお話ををするについては先づ朗讀や詠誦から進んで修養するのが早道であります。なぜかと云ふに、これ

までに出来た立派な型があり、それを朗讀し誦誦する、さうしてその好い型を習ひ、それから後に自由自在に創作的に演述をする方が、勞が少くて功が多いから、上達が早いからであります。それは西洋あたりだけにして居ることではない。我が日本でも佛教の方面では、たとへば説教を習ふについては、読み法談といふ説教の型の本によつて説教の稽古を致し、その仕ぶりを師僧が批評をして修練をさせ、段々それに達してから自由に説教をするやうになつて居ます。始から誰だつて創作的にうまく出来るといふはずがない。ですから將來この話術を進歩させるためには朗讀法を發達させる必要があります。さうして朗讀以上に誦誦までする價値があるものなれば、誦誦を行ふのが宜しい。朗讀や誦誦に達してから自由發表をする演述に進むのが、話術を進歩させる早道であると考へます。

世の中には天才的の人もありますが、しかし實はさういふ天才も、多分は修養の結果であります。御承知のギリシアのデモステネスであります。此の非常な雄辯家も、始は訥辯で話が出來かねたのを殘念に思ひ、鏡を前に立てゝ置いて色々工夫をして話の稽古を致しました結果、遂に大雄辯家になれたといふことが、話術の歴史に輝いて居ます。その他の例に照して見るに、如何なる天才でも努力修養しなければ達人となることは出來ませぬ。徒然草にも兼好法師が教へて居ます。何でも一技一藝に達しようといふ人は、始は人に笑はれても、それを忍んで段々稽古をして行くうちに達人となれるのだ、それを達人になつてから發表しようと思つて尻込みして居る人は、一生涯達人になることは出來ないと、斯う教へて居ます。

それで朗讀も修養しなければ駄目でござります。朗讀といふことは、祝辭や弔辭を読むやうなことに限りませぬ。立派な演説の筆記を堂々と読み上げるのも朗讀です。それには明治以來の名演説といふものを編纂した書物が出來ると結構だと思ひます。それを達人が朗讀して聽かせる、さうしてそれを習はせる、即ち先づその朗讀を習はせて、そ

れからそれを詰誦させる。さうじて更にそれを堂々と人前でもやらせるのであります。その修養を積んで後に、自分が創作的に演説を修行すると、つひには名演説が出来るやうになります。ですから今後話術を進歩させるのには、急がは廻れ、先づ朗讀から學ばせる可きであります。それから詰誦、それから演説といふ風に進ませるのが、確かに話術を進歩させる道行でございませう。落合直文といふ國文の先生がありました。この先生が學生から、文章を作るのにどうしたら上手になれませうかといふ間に答へて、さう、君が、これは好い文章だと思ふのを十ばかり選んで置いて、常にそれを読んで詰誦する位まで読むと、文章が上手になれるよと教へられたさうです。これは恐らく先生自身が先づ體験されたことだらうと思ひます。先生の謂はゆる文章は昔の和文であつて、今の言文一致の文章ではなからう。さういふ古代の言葉を綴る文章でもさうであるのですから、まして今日活きてゐる言葉の文章に此の教訓を用ひれば、效果のあること疑ありません。一九の膝栗毛、三馬の浮世床や浮世風呂、四朝の牡丹燈籠など、審美的朗讀の好い種本です。

そこで形式に囚はれるといふことはいけませぬが、術といふものは先づ形式から習ひこむのが宜しい。その形式はたゞ作つたものではありません。昔からの経験で、かういふ風にした方が徹底すると認めた、その體験の結果が形式でござります。繪をかくのもさうであります。師匠について型を習つて、その型を十分分習ひこんでから創作を勵むと立派な繪がかけるやうになります。すべての藝術も同様でござります。斯く申す私は、藝術に甚だ不束でございますが、教育に關係して居ります。どうも我が國に朗讀法の案内書がない、西洋にはエロキュー・ションの書物が多くあるのに日本にはなかつたのを殘念に思ひました。前かた明治四十年のころ早稻田て坪内先生が門下の方々と文藝協會を設けられ、その部わけの中に朗讀法の研究をも始められたと聞きました、どうかその研究を早く發表されるやうにと、

待つて居ましたが、中々出ませぬので、甚だ未熟なものでしたが、大正三年ころに朗讀法の本を一冊發表致し、その後これを訂正増補して「朗讀法精説」といふ書物(東京の中文館發行)を出して置きました。近來教育其の他の必要からして朗讀のことが大いに研究されて居ますのは、實に結構でござります。

(二) 朗讀法とは何か

さて別紙に書いて置きましたのが朗讀法の理論の要領でござります。煎じつめて見ると、物事の要領は簡明になります。此一枚の要領を御承知になれば宜しい。詳細に説明致すと時間が足りませぬから、ざつと説明致します。朗讀法そのものは日本にも支那にも古来あつたに違ひないので、これを書き表はした書物はございませぬ。あれ程いろいろくの書物のある支那に奇恵にも朗讀法の書物が見つかることはせぬ。それで大體は西洋の朗讀法の型を参考したのでございります。

先づ朗讀法の定義を申せば、それは「文章を正しく且つ趣味あるやうに読みあげる方法」であります。文章を正しく且つ趣味あるやうに読みあげる方法を言ひ換へると、「文章の意味を聽者か十分に理解するやうに發表するのみならずその趣味をも善く感するやうに發表する術」といふことであります。もう一度言ひ換へると、「一定の標準に依つて美妙に讀む術」といふことであります。

それでは朗讀法の祕訣といふものがあるか。それは次の二ヶ條より外にありませぬ。第一に、先づ文章の思想感情を我るものとすることです。それでなければ、鸚鵡の眞似事であります。第二に、朗讀の方法を自覺して之を運用することです。即ち、悲しい所は斯う讀む、嬉しい所は斯う讀むといふやうに、読みぶりを自覺しなければなりません。

我々が不斷自然にやつて居ることでも、さて是から讀まうとする時には、どのやうに讀むと悲しくさへ見えるか、どのやうに讀むと嬉しく見えるかといふことを自覺して居ると、朗讀に確信が有つて、自由自在に読み去り読み來たることができます。以上の二ヶ條が朗讀の祕訣でござります。朗讀法に説くことは、不斷我々がやつて居ることで、分り切つたことあります。それでなければ役に立ちませぬ。若し魔術師のやるやうなことで有つたら駄目であります。學問は、總べて日常眼の前にあることを自覺して之を運用するためにするのであります。論語に孔子が「道は遙きにあり、而るに之を遙きに求める」のを戒められました。道徳のみならず、總べての人文上の事がさうでござります。我々の日常眼の前にあることを善く自覺して運用する、それが道といふものであります。朗讀法も、やはり讀むといふ道でございまます。

(三) 朗讀の練習、先づ發音法

そこで朗讀の方法を立てますと、發音法と表出法になります。發音法とは、言葉の音を正しく出すことです。我が國では、とかく發音が疎かにされて居ますから、朗讀の土臺が不安であります。たとひ大人でも尋常一年生のやるやうなことから正して行かなければなりません。國語を教へたり、演説の稽古をさせるやうな時に、どうも發音を疎かにします。そのやうなことは子供に向つて言ふことだ、大人に向つては馬鹿げて居るやうに思はれ易い。しかし馬鹿げて居るどころではない、土臺のアイウエオから正してからねばなりません。例へば東北地方や出雲地方ではイとエの區別が判然しませぬ。それで堂々と幾時間でも原稿なしに演説をなさる御方が「一般」を「エツバン」と發音されると、いかにも耳ざはりになります。立派な演説であるのに、イとエとの訛りで玉に瑕です。ですからアイウエ

オから正さねばならぬのであります。學校では尋常一年生、これが最も國語教授の大なる時であります。この時發音を疎かにしておいたならば、長くいけないことになつてしまひます。英語の先生などの良い教授法を見聞しますと、二十歳を越したやうな生徒に向つても、先づABCの綴りの發音から正してからります。少しでも間違ひがあつたら容赦致しませぬ。ですから土臺がしつかり固まつて居ます。つまり發音法は話術の地がためであります。その地がためが弱いと、折角の話術が立派に建築されないことになります。近來は國語の發音法の教授に好く注意されてきたのは結構なことでござります。それに正しい發音の朗讀をきかせるレコードが出來、またラヂオが全國に放送されて居り、これからして日本の國語は彌益に榮えることでございませう。

そこで發音といふ地がためが出來、その上に正しく讀むといふ正讀練習、それから美讀練習をするのであります。美讀といふのは正しく且つ趣味あるやうに讀むといふことであります。大體分けて說いて見れば三つになりますが、それは決して別々のものではありません。發音練習も正讀練習も美讀練習も三位一體であります。

それでは發音練習の例はと申しますと、初發に母音が大切です。國語では短母音のアイウエオ、それから長母音のア、イー、ウー、エー、オー、それから母音の二つ重なつたアイとかエイとかオイといふ重母音であります。それから父音、父音は子音とも云ひます。例へばカといふ音は、Kといふ父音とAといふ母音と二つが組合さつた熟音であります。熟音は音節とも云ひます。音節といふのはシラブルの譯語です。それから撥音即ちねる音のン、次は促音即ちづめる音などを練習させる。それから音をつないで行くと、そこに音の變化があります。例へばギンアンが連聲でギンナンとなるとか、タビヒトが連濁でタビビトとなるとかの類です。さうしてアクセントの事、これが國語教授上の一問題でござります。國語のアクセントは西の方と東の方とで大差があります。何處がその境になるかと申しま

すと、表日本では美濃の揖斐川の下流がその境になつて居ります。あの揖斐川を越えて伊勢の桑名へ行くと西のアクセントになり、揖斐川の東の尾張へ行くと東のアクセントになります。揖斐川の下流に沿つて北に上り、それから西北にそて美濃の垂井(たるい)に行きますと東西の中間アクセントになつて居ます。それから凡そ西北濃の境を経て飛驒の分水嶺について信濃境から黒部川邊りに出で居るさうです。アクセント以外のことは容易に眞似が出来ますが、アクセントは家庭からしみこんで居ますから中々抜けませぬ。東京から行つて上方の女優を教へた人の話に、折角教へ込んだと思つたのに、舞臺へ出ると直ぐ西アクセントになつて始末に終へないといふことでした。上方アクセントの聽衆に對する氣合も有つて自然さういふ語調になつてしまふのでせう、小學校の國語教授のアクセントの標準は、標準語即ち東京語のアクセントとすることは、當然であります。が、多くの師範學校で標準アクセントの學習は未だ困難とされて居ます。特に西部においては、大概は教へる先生を始としてそれが出來ませぬ。だから今の所はその土地のアクセントを許容しておくより仕方がありますまい。ついでに申しますが、平安朝の京都のアクセントを記した辭書に類聚名義抄といふのがあります。そのアクセントを見ますと、今の京都アクセントと大體一致して居るやうです。語法などは直ぐ眞似が出来ますが、語調即ちアクセントは容易にかはりませぬ。かはらないことはありませぬが、元のアクセントの力が強くて中々抜けないのであります。とにかく標準アクセントのレコードを聴かせて耳馴れさせたいものです。言葉は先づ聞き馴れることが根本であります。ラヂオが放送され、レコードが何處でも求められることは、國語のため誠にうれしいことです。その所のアクセントは許容しておいても、成るだけ標準アクセントを聴かせて真似させる方が宜しい。

それから發音矯正の事。これは吃音矯正において夙に行はれてゐる事であります。しかし我々も多少は吃りです。

謂はゆる吃りは、それが著しい者で、常人はそれが著しくないだけの差です。その證據に、たとへば「早口」を言つてみると、お互に中々出來ませぬ、「早口」は發音練習のため世の中に出來て居るもので、各國ともにあります。「長持の上に生米七粒」これを早く言ふと間違へ易い。諸國の「早口」を調べて見ましたが、日本はすぐれて發達して居ます。この「早口」は芝居にまで發達して、歌舞伎十八番の一つ、小田原の「外郎賣の臺詞」といふのがあります。第一流の役者が聽衆の知つて居る色々の「早口」をすら～とやつてのける所に興味があります。我が國には音聲研究の材料が實に澤山ござります。さて發音矯正法に色々あります。一に、小聲でさせる。大きい聲だと間違ひ易いが、小さい聲だと間違ふことが少い。二に、徐々とゆっくりさせる。早く言ふと間違ひ易いが、ゆっくり言ふと間違ふことが少い。三に母音だけで言はせる。例へば、子供の中には「栗がはぜた」を「ク、ク、ク、ク、クリガ、ハ、ハ、ハゼタ」と吃る者がある。これを「ウイア、アエア」、「ウイア、アエア」と父音ぬきで母韻だけで先づ練習させて、それから元の言葉で練習させるのであります。またこれらの諸方法を混成してさせる混成法もあります。「早口」は地方によつて異同があり、例へば東京邊では「神田鍛冶町の角の牛物屋で勝栗買つたら堅くてかめない」など、上方邊では「京の三十三間堂の佛の數を數へて見たら三萬三千三百三十三體であるとの」などといふ類です。共通のも多く有ります。「朗讀法精説」の附録に、多く之を集めて置きました。

(四) 表出法、句讀と重念と昇降と調音

發音法に續いて説くのが表出法であります。表出法は思想感情を表出する方法で、之を數項目に分けて説きます。その第一が「句讀」です。それは言葉の切り方であります。句讀と言ふと文章につけるしるしのやうに聞えますが、常に

我々の言ふ言葉に句讀があります。それは休止とも、英語ではボーズとも申します。句讀に語法的のと美辭的のとあります。語法のは正しく讀むためのもの、美辭のは興味あるやうに讀むためのものであります。

第二が「重念」です。これは支那語から採つた語であります。「重念」とは強く言ふことで言葉の強弱です。これにも理解的のと表情的のとあります。理解的は正しく讀むためであります。その理解的に一般的のと特殊的のとあります。即ち普通に用ひる一般的なものと、特別の事情で用ひる特殊なものとであります。例へば「鯨は獸だ」と言ふ場合に、普通は「鯨」と「獸」が重念になりますが、「鯨は獸だか獸でないか」と聽かれた時には「鯨は獸だ」といふ「だ」が特別に強くなります。それから表情的重念、これは趣味あるやうに表情するのです。これには四種ほどありますて、一に重ね、例へば「●●●●●●とばかり花のよしの山」などと言ふ。二に引延し、例へば「天川屋の義平は男で御座る」と言ふ時には強める言葉を引延す。早くやつてしまつては「男」にならない。三に叫び、これは大音聲で叫ぶ。例へば「宇治川の先陣」で佐々木高綱が名乗をあげるやうな場合。四に「とされ」、例へば判官様の切腹の時に大石が申上げる御別れの言葉、「唯、御最後の、尋常を、願はしう、存じます。」かういふのであります。

第三が「昇降」即ちイントネシヨンであります。これは言葉の尻を上げたり下げたりすること。言ひ換へると抑揚であります。「地球は圓い」と「圓い」をさげると、斷定になります。「地球は圓い」と「圓い」をあげると、疑問になります。かやうにして「昇降」を分けると、降調と昇調とになります。降調の方は、一、意味の完結した場合、二、人から尋ねられた時に、單に「はい」又は「いいえ」それだけでは答へられない間の場合、三、實際に聞くのでなくて假に聞く場合、例へば子供が悪い事をした時に「お前そんなことして悪いのか」と終りをさげれば、悪いとこちらで斷定して居るけれども、反省させることになります。四、命令や宣告も降調であります。五、憤怒や憎惡の場合、例へば高師直が

判官様を憎んで言ふ時、また判官様がそれに憤つて「おのれ師直、眞つ二つ」と言ふやうな場合は降調になります。六、強めや感激の場合も降調になります。降調とは反対に昇調の場合はどうか。一、意味の完結しない場合。二、單に「はい」又は「いゝえ」と答へられる間の場合。例へば「君、これで可いか」「はい」又は「いゝえ」と答へられる場合の如きです。三、歡喜や有望や仁愛を表はす場合。例へば「うれしやく」。四、絶叫する場合。五、崇拜や稱讃をする場合。六驚愕した場合。七、疑惑の場合。八、祈禱や懇願をする場合。以上の如き場合には昇調を用ひます。

第四が朗讀の總體の「調音」であります。即ち高低と強弱と緩急との組合はせでです。音樂は感情を主としたものですが、音樂も朗讀も調音において共通なものがあります。第一に高低の事。音樂で人聲を女聲と男聲とに分けます。さうして女聲も男聲も高と中と低に分けます。女聲の高聲はソプラノ、中聲はメゾ・ソプラノ、低聲はアルトーノであります。男聲の高聲はテナー、中聲はバリトーン、低聲はバスであります。之を言ひ換へますと、女聲の高と中と低とは、上高音部と次高音部と高音部、男聲の高と中と低は、保持音部と上低音部と低音部とも云ひます。大體、子供は女聲と一致します。男の子供でも聲變りするまでは女聲と同じです。それが聲變りをすると低くなります。

第二に強弱の事。高い低いと強い弱い、これは混同され易いが、高い低いと強い弱いとは別です。同じ高さ又は低さでも、強くも出來れば弱くも出来る。この強弱を大體五段に分けます。甚弱、弱、中、強、甚強であります。音樂の方では、甚弱をピアニシモ、弱をピアノ、中強をメゾ・フォルテ、強をフォルテ、甚強をフォルチシモと云つて居ます。

第三に緩急の事。速さも五段ほどに分けます。緩徐、緩、中、急、急速であります。音樂の方では、緩徐をレント、緩をアダヂオ、中をモデラート、急はアレグロ、急速はブレストーと云つて居ます。

読み聲の高さ、強さ、速さは心情の工合で變ります。心情と高低、強弱、緩急との關係の例を「朗讀法精說」には十六種類ほど擧げて置きました。今はほんの代表的なものを十幾つ説明のために擧げます。例へば莊重に讀む場合は、低く、中位の強さで、緩やかに讀むべきです。勅語を捧讀致しますやうな場合には莊重を要します。稱讚をする場合は、中高、中、中緩。歡喜の場合は、高、中、中緩。謹慎の場合は、中、弱、緩。悲哀の場合は、低、混合、緩。混合とは強と弱と入り交り慄おどろへ聲になることです。壯快な場合は、高、弱、急。叱責の場合は、中高、強、中急。激怒の場合は、高、強、急。怨恨の場合は、中、強、急。自慢の場合は、中、強、中緩。滑稽の場合は、高、弱、中急。畏懼の場合は、低、混合、中緩。秘密の場合は、低、弱、中緩。讒悔の場合は中高、中、中急。優美に讀む場合は、中、弱、中。勇武の場合は、高、強、中緩。祈願の場合は、低、中、中急。代表的なものは、大體かういふ工合であります。なほ他の種類も、多少は組合はせがちがひます。その心情の場合に應じて、高低、強弱、緩急の加減をしなければなりません。

それから朗讀に於ける人數の當て方を申します。これは練習をさせる場合、又は公開の場合に心得ておくのが宜しい。一はひとりよみ(單獨朗讀)、二はつれよみ(隨伴朗讀)、下手な子供でも上手な子供につれ読みをさせると上手になります。鳴くことの下手な爲でも、上手な爲の傍でつれ鳴きをさせると上手になるさうです。三はまはりよみ(順番朗讀)、長い文章などは一人ではやり切れませぬから、順番に讀ませます。朗讀會などで、長い文を三人なり五人なりで順番に朗讀させるのも、面白いものです。四是かけあひよみ(掛け合朗讀)、これは男と女、老人と少年といふやうに、さういふ人物が讀本などに出て來ますから、それへ適當に読み手の割當をして掛け合で朗讀をさせるのも、中々面白いものであります。五はそろひよみ(一齊朗讀)、時々は一齊に朗讀せるのも、和聲諧調があつて面白いもので

す。朗讀法の組織は、さつと以上の如くでございます。五分間休憩を致します。

(五) 國語の音韻組織と思想感情

それでは又始めます。お國自慢ではありませぬが、日本語の組立は誠に善く出来て居ます。無論西洋語の組立にもそれぐ長所はあります。日本語の組立は必要にして且つ十分に出来て居ます。これは實に我々の祖先が、幾代も幾代も前の神代から合作してくれました賜物であります。實に結構な國語を祖先が傳へてくれたといふことは、誠に有りがたく感謝すべきでござります。日本語は理智的にも好く出来て居ますが、感情的にも好く出来て居ます。

先づ我々の言葉の基礎母音は、ア、イ、ウ、エ、オでございます。之について一通り申上げたい。これは國語の母音として根本的なものでありますから善く口を開合して練習させねばなりません。先づ舌を下げて口を大きく開いた母音がアです。兩唇を扁平に開いて、前舌面を硬口蓋に近づけた母音がイ。後舌面を軟口蓋に近づけ、兩唇を平たく小さく開いた母音がウであります。この三音は、世界中の何處の言葉にもある母音だと云はれます。或る國語にはエやオのないものもありますが、日本語にはア、イ、ウの中間の母音があつて、イとアとの間のがエ、ウとアとの間のがオであります。本居翁が「漢字三音考」を著して、世界中で日本語の音聲が一等正しい、外つ國の言葉の音聲は鳥獸の音に近いと言つて、お國自慢をされた。外つ國の言葉が鳥獸の音に近いといふ説は獨斷偏見だが、日本語の五つの母音は、謂はゆる「母音三角圖」において、正しく中庸を得て居ます。これが誤りましてイとエとがこんがらかると、「兄さん」か「姉さん」か分らぬことになります。それから或る地方ではエとオとが非常に近寄つてて不快にきこえる訛音もあります。正さねばなりませぬ。

さてイとエとアを前母音といひ、ウとオを奥母音といひます。音の感じから申すと、前母音の方は、場合によつて、小さいこと、軽快なこと、明るいこと、などの感じを表はします。これに對して奥母音の方は、場合によつて、大きいこと、沈重なこと、暗いこと、などの感じを表はします。例へば「ちひさい」と「おほさい」、「かるい」と「おもい」「あかるい」と「くらゐ」などの如きであります。語感はその語の第一音又は第二音において最も多く現れます。なほ語感は母音だけでは無く、その父音の性質にも、大小や輕重や明暗などの感じが現れるのですから、簡単には説かれませぬ。それのみならず言葉は複雑な事情で出來て居るから、全部とは申されませぬが、場合によつて母音がさういふ感じを表はして居ますのですから、之を讀むとき話すときに、さういふやうな氣持で發音すると、その感じが能く映ります。重ねて申しますが、言葉は色々の事情で出來て居ますから、全部さうだと言ふわけには行きませぬ。けれども吾々の祖先が言ひ始めた時分の根本になる言葉には、さういふ感じが多く表れて居るやうです。それで今までの學者の研究致しました書物から、その例を擧げてみませう。

尾張の鉈木脤あきらといふ人は、日本の古雅な言葉について研究し、「雅言音聲考」といふ書物を著しました。この人は、言葉の本は擬聲であるといふ説を立てました。西洋でも擬聲説がございまして、例へばリンはリンリンと鳴り、大砲はドンと鳴るから、リンといひドンといふのだと説く。これは或る度までは宜しいのですが、度を超すところじつけになります。どの言葉でもリンドンセオリーでは困る。鉈木氏の説いた例は大概は正しいやうです。第一に鳥獸の聲を擬したもの、例へば「鶴」はカラ、「蟋蟀」はキリ、キリ、と鳴く。それに後でスを附けたのだ。第二に人の聲を擬したもの、例へば「吹く」はフーと吹く音、「吐く」はハーと吐く音に、語尾の「く」を附けたもの、「咬む」はカチ／＼と咬む音の「か」に語尾の「む」を附けたものだ。第三に萬物の聲、例へば「そよぐ」はソヨ／＼と吹く風の音で、「ぐ」は語尾

であり、「叩く」は、戸などをタ、タンと叩く音で、その「た」に語尾の「く」を附けたものだ。第四に萬の形、有様、意味、仕業、さういふものを象つたもの、例へば「四い、赤い、粒、原、空」などのやうなものだと説いてあります。これは或る度まで眞實であるが、度を超すと行詰つて、はてはこちつけになります。

その後に鈴木重胤といふ人が「詞のちかみち」といふ書物を著しました。この人は音義説の一學者で、音には皆意義があり、ア行、カ行、その他の諸行の音にそれなり意味があると唱へたのであります。即ち、ア行には廣い厚い意味がある。例へば「あまねし、あつし、あける、おほさい」などの類。カ行には堅牢の意味がある、例へば「かたい、かむ、きる、こはい」などの類。サ行には窄小、即ち狭い小さい意味がある、例へば「せまい、ささやか、しばる、せめる」などの類。タ行は剛直な意味がある、例へば「たたしい、たつ、とほる、とまる」などの類。ナ行には和順、即ち和やかな意味がある、例へば「なごやか、なれる、ねむる、のびる」の類。ハ行には物が變つて行く意味がある、例へば「はねる、ひしご、ふせぐ、ほこうびる」などの類。マ行には渾融の意味がある、例へば「まるい、まつたい、みぢる、もろもろ」の類。ヤ行には前に進む意味がある、例へば「いよいよ、やる、ゆく、よせる」などの類。ラ行は日本語では餘り語頭に用ひないが、ラ行は重に形狀を表はす、例へば「まるい、ゆるい、はるか、あきらか」などのやうだ。ワ行には物の採曲する意味がある、例へば「わがねる、わるい、ゑぐる、をこたる」などの類であると説いて有ります。これも或る度までは正しいのですが、度を超すと行詰つてしまひます。とにかく斯ういふ言葉は、我々の祖先が合作した言葉でありまして、西洋語でもなければ漢語でもない。我々の祖先がさういふ意味で合作した言葉のやうに感ぜられます。たゞ何でもかでも是で説かうとすると間違になります。

それから大島正健博士、只今七十六歳で健在でいられます。前かたこの人が「國語の組織」といふ書物を著されまし

た。この本は今は絶版で、その増訂された「國語の語根とその分類」といふ書物が先頭出ました。これは、堀秀成の「音圖大全解」の如き考察を改修した新音義説のやうです。餘程進歩した説であります。長くなるから今その説の一端を擧げるに止めます。大島博士は各行の各音を説くのに一種に片寄られませぬ。例へばアの音には「空」の義や「上」の義や色々ある、例へば「天、普し、數多、穴、明く」などは「空しい」の義を含み、また「あぐる、上がる、崇む、兄、姉、仰ぐ」などは「上」の義を含む、また外の義も含むといふ様に説かれる。一種に説かれないのが宜しい、進んだ説であります。本書について讀むと面白うございます。これも大昔の先祖からの言葉で説かれてある。カの音には堅い意味もある、例へば、「かちかち、かたかた、堅し、固める、塊、型、形、難し」といふ類、サの音には「裂く」の意味もある。例へば「裂く、避く、境、刺す、指す、觸る、去る」といふ類。タの音には「長る」の意味もある、例へば「長る、猛し、猛る、逞し」といふ類。その他の諸例を申すことは略します。とにかく結構な研究でございます。朗讀する場合に、さういふ氣持で讀むと、感じを深くするやうでござります。

また澄む音と濁る音、即ち清濁に對する感じがちがひます。これも前母音と奥母音との關係に似た對照が感ぜられます。「ころく」と言ふと、小犬や小石などの感じが致します。「ごろく」と言ふと、大雷や大岩などの感じが致します。凡そ清音は、小さい、軽い、明るい、やうな感じが致し、濁音は、大きい、重い、暗い、やうな感じが致します。また清音は若い感じが致します。若い内は「父、母」でありますけれども、年取つて孫が出來ると「爺、婆」になります。また「さら／＼」と言ふと好い感じが致し、「さら／＼」と言ふと嫌な感じが致します。「鼠がこと／＼」と言ふと小さい感じ、「こと／＼」と言ふと大きな感じが致します。風車は「くる／＼」と軽く廻るし、水車は「ぐる／＼」と重く廻ります。「する／＼」と言ふと、速い感じがするし、「ずる／＼」と言ふと、遅い感じがします。「スカツと切る」と言ふと、

鋭く切ること、「ズカツと切る」と言ふと、鈍く切ることです。「國旗はひらく」と言ひますが、「國旗はびらびら」とは言ひませぬ。破れた着物なら「びらく」と言ひます。そつと取つたときには「こつそり取つた」と言ひ、根こそぎ取つたときには「ごつそり取つた」と言ひます。かういふあんばい式に色々な點から見て、國語の音は我々の感じを能く表して居るのです。ですから我々が讀む時にも話す時にも、さういふ氣持を自覺して居ると、聽く人に徹底するやうです。理窟を申すことは、先づこの位にして置きまして、これから少々實際の朗讀を致して見ませう。

(六) 口語體と文語體との朗讀、國語の發達のため

さて言文一致の文章即ち口語文は、我々の自然に話すことを進據として讀まねばなりません。文語の文章は、今我々の話して居ないもので、これを讀む標本がありませぬ。誰も今話して居ないものですから、一定の進據がありませぬ。それで平安朝の物語を讀むのに、自分勝手の読みぶりをしてしまはれないわけですが、しかし竹取物語や源氏物語を本文式に讀むのには、上方の人の話しぶりで讀むのが最も宜しい。これを東京辯風に讀んでは情調が出ない。これと反対に今の東京辯で書いた小説を上方辯風に讀むと、變な調子にきこえます。試みに枕草子を少し讀んで見ます。その文章は、御承知の平安朝隆盛期の一女官であつた清少納言が書いたもので、當時の言文一致です。言文一致だから、あのやうな名文が書けました。これは東京アクセントでも讀めますが、やはり類聚名義抄に記してあるアクセントのやうに上方辯風に讀むと情調が出るやうに感じます。私は上方辯に不馴れですが、ほんの眞似をしてみませう。

春は晴。やうやく白くなり行く山際すこしあかりて、紫だちたる雲の細くなびきたる。夏は夜。月の頃はさらなり、闇もなほ螢飛びらかひたる、雨など降るさへおかし。秋は夕暮。夕日はなやかにさして、山の端いと近くな

りたるに、鳥のねどころへ行くとて、三つ四つ二つなど飛びゆくさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるがいとちひさく見ゆる、いとおかし。日入りはてゝ、風の音、虫のねなど、いとあはれなり。

先頃源氏物語を芝居にするといふ話がありましたが、さうするなら上方辯にした方がその情調に叶ふやうに思ひます。これと反対に、紅葉や漱石の作物を上方辯風に讀んでは、その情調が出ませぬ。一つ漱石の「草枕」の雲雀の所を讀んでみませう。

忽ち足の下で雲雀の聲がしだした。谷を見下ろしたが、どこで鳴いてるか、影も形も見えぬ。只聲だけが明かに聞える。せつせと忙しく、絶間なく鳴いて居る。方幾里の空氣が、一面に蚤に刺されて居たたまらない様な氣がする。あの鳥の鳴く音には、瞬時の餘裕もない。のどかな春の日を鳴き盡し、鳴きあかし、又鳴き暮さなければ、氣が済まんと見える。其上どこまでも登つて行く、いつまでも登つて行く。雲雀は屹度、雲の中で死ぬに相違ない。登り詰めた揚句は、流れて雲に入つて漂うて居るうちに、形は消えてなくなつて、只聲だけが空のうちに残るのかも知れない。

巖角は銳く廻つて、按摩なら眞逆様に落ちる所を、際どく右へ切れて、横に見下ろすと、菜の花が一面に見える。

雲雀はあすこへ落ちるのかと思つた。いや、あの黄金の原から飛上がつてくるのかと思つた。次には落ちる雲雀と上がる雲雀が、十文字にすれ違ふのかと思つた。最後に、落ちる時も、上がる時も、また十文字に擦れ違ふときにも、元氣よく鳴きつづけるだらうと思つた。

これを上方のアクセントで讀むと、變にきこえます。併し上方の人に東のアクセントでこれを読みなさいと言つたところで、出來かねますから、今の所許容して置くより仕方がありませぬ。淨瑠璃などは上方辯ですから、大阪は文樂

座の御連中が一等宜しい。とても東京辯では駄目です。また膝栗毛の彌次郎兵衛や北八は江戸ツ子で行かなければなりません。しかし膝栗毛の中でも、京の喧嘩などを江戸ツ子辯でやつては、丸で京の喧嘩に成りませぬ。

これから小學讀本を読んで見ませう。子供は大人より呼吸が速いから、大人の速さではいけませぬ。尋常小學國語讀本は、その程度の子供の呼吸に合はせなければなりません。舊本卷三「うらしま太郎」の一章、これは一分五十秒位で読むと宜しい。

うらしま太郎（原文は分ち書き）

むかしうらしま太郎といふ人がありました。ある日はまを通ると、子供が大ぜいでかめをつかまへて、おもちやにしてゐます。うらしまはかはいさうにおもつて、子どもからそのかめをかつて、海へはなしてやりました。それから二三日たつて、うらしまが舟にのつてつりをしてゐますと、大きなかめが出てきて、「うらしまさん、このあひだはありがたうございました。そのおれいにりゆうぐうへつれていつて上げませう。私のせ中へおのりなさい」といひました。うらしまがよろこんでかめにのると、かめはだんだん海の中へはいつていて、まもなくゆうぐうへつきました。りゆうぐうのおとひめは、うらしまのきたのをよろこんで、毎日いろいろなごちそうをしたり、さまでまなあそびをして見せたりしました。うらしまはおもしろがつて、うちへかへるのもわすれてゐましたが、そのうちにかへりたくなつて、おとひめに「いろいろおせわになりました。あまり長くなりますが、もうおいとまにいたしませう」といひました。おとひめは「それはまことにおなじをしいことでござります。それではこの玉手箱を上げます。どんなことがあつても、ふたをおあけなさいまますな」といつてきれいな箱をわたしました。うらしま

は玉手箱をもつて、又かめのせ中にのつて、海の上へ出てきました。うちへかへつてみると、おどろきました。父も母もしんでしまつて。うちもなくなつてゐて、村のやうすもすつかりかはつてゐます。しつてゐるものは一人もありません。かなしくてかなしくてたまらませんから、おとひめのいつたこともわざれて、玉手箱を開きました。すると、箱の中から白いけむりがばつと出て、うらしまはたちまち白がのおぢいさんになつてしまひました。(二) 分十五秒)

これは一分五十秒位だと丁度東京あたりの子供の速さに合ひます。大人が読むと、時間がのびがちです。次に同巻の「さき舟」の一章を読みませう。これは一分二十秒位が宜しい。

さ き 舟 (原文は分ち書き)

日の光がやはらかにさして、小川の水はきれいにすきとほつてゐます。風がしづかにふいて来て、さしのさるがさらさらとおとをたててゐます。

二郎「三郎さん、又今日も舟をながしてあそびませう。」

三郎「又はしりくらをさせませう。五郎さんもなかまにおはいりなさい。」

みよ子「私はかちまけを見る人になりませう。」

男の子三人はささのはをとつて、舟をこしらへました。みよ子はささの小えだを手にもつて、土ばしの上にたちました。

みよ子「さあ、私がこゑをかけましたら、みなさん一しょに舟を出すのですよ。一・二・三。」

三人は一しょに舟を出しました。舟は風にのられながら、土ばしの方へながれて行きます。三人は舟とならんで

川のふちをかけて行きます。草のはにとまつてゐたてふが、おどろいてとびたちました。

みよ子「あら、てふてふが五郎さんの舟にとまりました。」

舟はだんだん土ばしへ近くなります。

五郎「ほうら、もうちきしようぶだ。」

みよ子はさつとささの小えだを上げて、

「一ぱんがち、五郎さんの舟。」

二郎「五郎さんばんざい。」

三郎「五郎さんばんざい。」

みよ子「五郎さんの舟には、てふてふのせんどうさんがのつたから、かつたのでせう。もう一どやつてじらんなさい。」(一分三十二秒)

東京の子供が読むのよりは後れました。

さて文語の文章は、誰も之を話して居る人がないのでから、よし節をつけて讀んでもかまひませぬ。それから漢文訓讀には技巧を加へて美讀をしても宜しい。唐の大文章家韓退之などの書いた文章は、言文一致ではありませぬ。あれは文語體であります。それで蘇東坡が韓退之の碑文に「文は八代の衰を起し」と書きました。八代の間廢れてゐた文を復興したといふのですから、明治時代に奈良朝風か平安朝風の擬古文を作つたといふわけです。

それから芭蕉翁の文章も、全く翁の藝術的作品ですから、どう讀んでも翁の氣分が出れば宜しい。文語體の祝辭や弔辭も、その氣分が出ればどう讀んでも宜しうござります。一等むずかしいのは口語體です。朗讀の下手と上手は口

語體のものに最も明かに現れます。芭蕉翁の「奥の細道」の白河の關の所を少し読んで見ませう。

心許なき日數重なるまゝに、白河の關にかかりて旅心定まりぬ。「いかで都へ」と便り求めしも理りなり。中にもこの關は三關の一にして、風騒の人、心をとどむ、秋風を耳に残し紅葉を傍にして、青葉の梢猶あはれなり。卯の花の白妙に、茨の花の咲きそひて、雪にも越ゆる心地をする。古人冠を正し衣装を改めし事など、清輔の筆にもとづめ置かれしとぞ。

かういふ文章は一等読みよいのであります。昔支那の齊國の王が、畫かさに向つて、「何をかくのが一等むづかしいか」と問ふと、「犬や馬の繪でござります、それは誰でも知つて居ますから。」「では一番かき易いものは何か」と問ふと、「鬼や化け物の繪でござります、それは誰も實物を見たことが有りませぬから」と答へました。今、口語體を讀むのは、犬や猫の繪をかくやうなものであり、文語體を讀むのは、鬼や仙人の繪をかくやうなのです。また詩吟で話をして居る人は決して有りませぬから、それはどんなに節をつけて吟じても宜しい。もう一度漱石の「草枕」を読んで見ませう。あの人は英文學者であつたが、餘り西洋文學を好みいやうで、大いに東洋文學の趣味を鼓吹した人であります。「草枕」は西洋文學の中毒を嘆いて東洋趣味を鼓吹した此の人の出世作であります。

苦しんだり、怒つたり、騒いだり、泣いたりは、人の世につきものだ。余も三十年の間それを仕通して飽き／＼した。飽き／＼した上に芝居や小説で同じ刺戟を繰返しては大變だ。余が欲する詩は、そんな世間的の人情を鼓舞するやうなものではない。俗念を放棄して、しばらくでも塵界を離れた心持になれる詩である。いくら傑作でも人情を離れた芝居はない。理非を絶した小説は少からう。どこまでも世間を出る事が出来ぬのが、彼等の特色である。殊に西洋の詩になると、人事が根本になつてゐるから、謂はゆる詩歌の純粹なものも、此境を解脱することを知ら

ぬ。どこ迄も同情だとか、愛だとか、正義だとか、自由だとか、浮世の勘工場にあるものだけで用を辨じて居る。いくら詩的になつても地面の上を駆けあるいて錢の勘定を忘れるひまがない。シェレーが雲雀を聞いて嘆息したのも無理はない。うれしいことに、東洋の詩歌はそこを解脱したのがある。

採菊東籬下、悠然見南山。

只それきりのうちに、暑苦しい世の中を丸で忘れた光景が出てくる。垣の向うに隣の娘がのぞいてる譯でもなければ、南山に親友が奉職して居る次第でもない。超然と出世間的に利害損得の汗を流し去つた心持になれる。

獨坐幽篁裏、彈琴復長嘯。

深林人不知、明月來相照。

只二十字のうちに、優に別乾坤を建立して居る。此乾坤の功德は「不如歸」や「金色夜叉」の功德ではない、汽船、汽車、権利、義務、道徳、禮儀で疲れ果てた後、凡てを忘却してぐつすりと寝込む様な功德である。二十世紀に睡眠が必要ならば、二十世紀にこの出世間的の詩味は大切である。惜しい事に、今の詩を作る人も詩を読む人もみんな西洋人にかぶれて居るから、わざ／＼呑氣な扁舟を浮べて此桃源に溯るものはない様だ。余は固より詩人を職業にして居らぬから、王維や淵明の境界を今世に布教して擴げようといふ心掛けも何もない。只自分にはかういふ感興が、演藝會よりも舞踏會よりも薬になるやうに思はれる、ファウストよりもハムレットよりも有難く考へられる。かうやつて只一人繪の具箱と三脚几を擔いで春の山路をのそ／＼歩くのも、全く之が爲である、淵明、王維の詩境を直接に自然から吸收して、少しの間でも非人情の天地に逍遙したいからの願ひ、一つの醉興だ。

家物語や太平記の地の文は文語體ですから、これを讀むのに一定の型はございません。その人の工夫で人を感ぜし

めるやうに読みさへすれば宜しいのであります。例へば「俊基朝臣の東下り」、これは七五調の整句文で、勿論、言文一致でありませぬ。おまけに詩も歌も入れてあります。かういふ文章は、たゞ趣味あるやうに感動を與へるやうに読みさへすれば宜しい。ですが、朗讀法の法則を破ることは出来ませぬ。やはり文語體の文章を読むのにも、朗讀法の心得は要ります。それには自由に朗讀の技巧を加へることができると云ふのでござります。太平記の「東下り」は俊基朝臣の哀れな境遇の心持を最もよく表現してあります。その作者は僧侶であります。御承知の如く、日本の聲の藝術は、印度文化の聲明に負ふ所が多大です。聲明は王朝時代に傳はりました。それは讀經や説教のみならず、朗詠、田樂踊、謡曲、狂言、淨瑠璃、田植歌、盆踊歌などの發達にまで影響してゐるものでござります。今後は更に西洋のエロキューーションを加へて進んで行きましたなら、どれほど日本の國語及び聲の藝術が發達して行くことでせう。世界の總べての良いものを取入れるといふのが、日本の國民性、日本文化の特色であります。話術の發達に於ても、この心がけは當然持たなければなりません。これから「東下り」を読んでみませう。

落花の雪に踏み迷ふ、片野の春の櫻狩、紅葉の錦を衣て歸る、嵐の山の秋の暮、一夜を明すほどだにも、旅宿となれば物うきに、恩愛のちぎり淺からぬ、我が故郷の妻子をば、ゆくへも知らず思ひ置き、年久しきも住み馴れし、九重の帝都をば、今を限と顧みて、思はぬ旅に出で給ふ、心の中ぞあはれる。

憂きをば留めぬ逢坂の、關の清水に袖濡れて、末は山路を打出の濱、沖を遙に見渡せば、鹽ならぬ海にこがれ行く、身を浮船の浮き沈み、駒もとゞろと踏み鳴らす、勢多の長橋うち渡り、行きかふ人に近江路や、世をうねの野に鳴く鶴も、文を思ふかと哀なり。時雨もいたく森山の、木の下露に袖ぬれて、風に露散る篠原や、篠分くる道を過ぎ行けば、鏡の山はありとも、泪に塗りて見えわかず。物を思へば夜の間にも、老蘇の森の下草に、駒を止めて顧

みる、古郷を雲や隔つらん。

番場、醒井、柏原、不破の關屋は荒れ果てゝ、猶もるものは秋の雨の、いつか我が身のをはりなる、熱田の八劍伏し拜み、汐干に今や鳴海渦、傾く月道に見えて、明けぬ暮れぬと行く道の、末はいづくと遠江、濱名の橋の夕沙に、引く人もなき捨小船、沈みはてぬる身にしあれば、誰れか哀と夕暮の、入相鳴れば今はとて、池田の宿に着き給ふ。元暦元年の比かとよ、重衡の中將の、東夷のために囚はれて、此の宿に着き給ひしに、

東路の、埴生の小屋の、いぶせきに、あるさといかに、戀しかるらん。
と長者の女が詠みたりし、その古のあはれまでも、思ひ残さぬ泪なり。（中略）

宿の名を問ひ給ふに、菊川と申すなりと答へければ、承久の合戦の時、院宣書きたりし咎に依りて、光親卿關東へ召し下されしが、此の宿にて誅せられし時、

昔、南陽縣菊水、汲^く下流^{アシ}而延齡^{イニシ}、

今、東海道菊河、宿^{リテ}西岸^{シカント}而終命^{シラフ}。

と書きたりし、遠き昔の筆の跡、今は我が身の上になり、あはれやいとぞまさりけん、一首の歌を詠みて、宿の柱にぞ書かれける。

古も、かゝるためしを、きく川の、おなじ流に、身をやしづめん。

大井川を過ぎ給へば、都にありし名を聞きて。龜山殿の行幸の、嵐の山の花ざかり、龍頭鶴首^{リョウトウツクシ}の船に乗り、詩歌管絃の宴に侍りしことも、今は二度見ぬ夜の夢となりぬと、思ひつけ給ふ。（中略）

七月廿六日の暮ほどに、鎌倉にこそ着きたまひけれ。その日やがて南條左衛門高直請け取り奉つて、諏訪左衛門に

預けらる。一間なる處に御手さびしく結ひて、押し箱め奉るありさま、たゞ地獄の罪人の、十王の廳に渡されて、頸械手械を入れられ、罪の輕重を糺すらんも、かくやと思ひ知られたり。(拍手)

次に平家物語の「小督局」の一章、これは局が清盛に憎まれて御所に居られなくなり、嵯峨の片折戸の内に隠れて居られたとき、勅を蒙つて仲國が月夜に寮の御馬に乗つて嵯峨を廻り、局を探し當てたことを叙述した名文であります。比は八月十日餘の事なれば、さしも限なき空なれども、主上は御涙に覺らせ給ひて、月の光も簾にぞ御覽せられる。やゝ深更に及んで、「人や有るく」と召されけれども、御いらへ申す者もなし。やゝ有つて彈正大弼仲國、其夜しも御宿直に參つて遙に遠う候ひけるが、「仲國」と御いらへ申す。「汝近う参れ、仰下さるべき旨有り」と仰せければ、何事やらんと思ひ、御前近うぞ參じたる。「汝若し小督が行方や知りたる」と仰せければ、「いかでか知り参らせ候ふべき」と申す。「誠や、小督は嵯峨の邊り、片折戸とかやしたる内に在りと申す者の有るぞとよ。主が名をば知らずとも尋ねて参らせんや」と仰せければ、仲國「主が名を知り候はでは、いかでか尋ね逢ひ参らせ候ふべき」と申ければ、主上、實にもとて、御涙せき敢へさせ給はず。仲國つくづく物を案するに、誠や小督殿は琴彈き給ひしづかし。此月の明かさに、君の御事思ひ出で參らせて、琴弾き給はぬ事はよもあらじ。内裏にて琴弾き給ひし時、仲國笛の役に召され参らせしかば、其琴の音は何づくにても聞き知らんするものを、嵯峨の在家幾程があらん、「打廻つて尋ねんに、などか聞き出さで有るべきと思ひ」「さ候はゞ、主が名は知らず候ふとも、尋ね参らせ候ふべし。たとひ尋ね逢ひ参らせて候ふとも、御書など候はずば、うはの空とや思召され候はんずらん。御書を賜つて参り候はん」と申しければ、主上實にもとて、やがて御書あそばしてぞ下されける。「寮の御馬に乗りて行け」と仰せければ、仲國寮の御馬賜つて、明月に鞭を揚げ、西を指してぞ歩ませける。

対話には節をつけない方が宜しいが、対話でない所には節をつけても宜しい。

「小鹿鳴く此山里」と詠じけん、嵯峨の邊りの秋の比、さこそは哀れにも覺えけめ。片折戸したる屋を見つけては、此内にもやおはすらんと、ひかへへ聞きけれども、琴弾く所はなかりけり。御堂などへも參り給へる事もやと。釋迦堂を始めて堂々見廻れども、小督殿に似たる女房だにもなかりけり。空しう歸り參りたらんは、參らざらんより中々惡しかるべきし。是よりいづちへも迷ひ行かばやとは思へども、いづくか王地ならぬ、身をかくすべき宿もなし、如何はせんと案じ煩ふ。誠や法輪は程近ければ、月の光に誘はれて、參り給へる事もやと、其方へ向つてぞあくかれける。龜山の邊り近く、松の一村ある方に幽かに琴を聞えける。峯の風か松風か、尋ねる人の琴の音か、覺束なくは思へども、駒を早めて行く程に、片折戸したる内に琴をぞ弾き澄されたる。控へて之を聞きければ、少しも紛ふべうもなく、小督殿の爪音なり。樂は何ぞと聞きければ、夫を想うて戀ふとよむ「想夫戀」と云ふ樂なりけり。仲國さればこそ、君の御事思ひ出で參らせて、樂こそ多けれ、此の樂を弾き給ふ事の優しさよと思ひ、腰より横笛抜き出し、ちつと鳴らいて、門をほと／＼と敲けば、琴はやがて弾き止み給ひぬ。「これは内裏より仲國が御使に參つて候ふ、聞けさせ給へ」とて、敲けども／＼、咎むる者も無かりけり。やゝ有つて、内より人の出づる音しけり。嬉しう思ひて待つ所に、鎖をはづし、門を細目に開け、いたいけしたる小女房の顔計りさし出で、「これは左様に、内裏より御使など賜はるべき所にも候はず、若し門達へにてぞ候ふらん」と言ひければ、仲國返事せば、門たてられ鎖さゝれなんすとや思ひけん、是非なく押し開けてぞ入りにける。

川柳は、この文の「峯の風か松風か、尋ねる人の琴の音か」といふ所を、たつた十七文字でうまく表現して居ます。

コロ はてな、リン はゝあ シヤン、こゝだわい。(笑聲)

またこの小督局を詠じた詩があります。小督局の墓は京都の嵐山の渡月橋の近所で、其所には五輪の塔に苔が生えて一本の松があり、昔を偲ばせる所でございます。伊藤聽秋といふ明治の詩人が「小督墓」を詠じた詩があります。

調玉佳人去幾年、苔碑駐馬弔黃昏。

丹楓江冷秋方老、満目名山月一痕。
(拍手)

名吟であります。此人は属官位で終つたやうに聞いて居ます。我々は人間世界においてやることが大であらうと小であらうと、何でも自分の身に叶つた事を楽しんでして行けば、そこに各々の樂地があるわけです。この聽秋も大した浮世の榮譽を望まず、自ら楽しんで詩を詠じてゐた時は、どれほど幸福であつたか知れませぬ。

三時間に色々ゴタ／＼申しまして、さぞお聽苦しかつたことでせう。この大日本の國語は我等の祖先以來積み蓄へた精神的財産であります。この國語の中に祖先の生命がこもつて居るのです。ですから、この國語を彌益立派なものに致したい。ついては言葉の本質である音聲を大事にし、耳の國語を發達させて行かねばなりません。そこで話術即ちエロキューーション、その中の演述や朗讀や暗誦の研究修練を少年や青年に奨励されることは、誠に喜ばしい。朗讀は暗誦や演述の素養となり、また諸藝術に發展します。即ち、讀む、語る、歌ふ、それから音樂といふことになります。その讀むといふのは朗讀。その次は節をつけて語る、平家物語を語り淨瑠璃を語る類。それから歌は餘程節が重くなつて居る。この次は音樂で、全く節となります。我々が通例讀むといふことの上に技巧を加へて、節といふ音樂的の味をつけるのが、語るとか歌ふといふことになります。實に讀むこと即ち朗讀は、實用のためにも藝術のためにも、大切な素養であります。どうぞ國のため道のため皆様が御機嫌よく御盡くし下さるやう御願申します。(拍手)

昭和十年七月二十日印刷行

編
者

文部省社會教育局

大賣捌所

法讀朗と法話

付 墏

【錢拾八圓貳金價定】

發行所

東京大阪
東洋圖書株式合資會社

發行者

永田與三郎

東京店 東京市神田区神保町一丁目六十七番地
振替東京一〇三七番・電話神田(25)三七一四五番

振替大阪三九五六番・電話東(94)二八六八番

所本製條中・所本製 | 社文宗・所屬印